

作——杜脇やさい

教室に戻ると、おかえりいと手を振る六花に迎えられる。「やー、慧ちゃんもモテますね。引つ張りだこでチューチューたこかいなっで具合じゃないですか」「もう、そういう話じゃないってわかってるでしょ」それにたこかいなっで。おつかれさん、と机に突っ伏する私を励ましてくれる六花の優しさはとかく後ろを向きがちな私にとつてありがたいことこの上ない。どうしてか六花だけは空が視えないから、余計な後ろめたさを感じなくて済む。他の人だとそうでもなくて、視ようと思えばその人の心の空が視えてしまう。空模様からその人がだいたいどんなことを言っているのかとかなど、なんとなくに悩んでるのかとかがわかってしまったりするせいで、なんとなく結構するなら慧だよめみたいな扱いを受けるようになってしまつて結構経つ。さつきも、真面目そうな桔梗坂さんから「将来とかわかんなくて、もう休学しちゃおうと思うんだよね」なんて相談されたりして、それはちよつと意外だったけどいつもどおり空を視て二言くらい話して終了。それが結構疲れたりするのだ。「ん。いろいろなひとの相談を受けて一番疲れるのは慧ちゃんだもんね。あたしの慰めならいくらでも貸しますよ」「うー。ありがと」

どうして人の顔色ばかり見ているのもつと胸を張りなさい、が口癖だった母と不干渉を貫く父のおかげで、いつも俯いて足元ばかり見させられて、あるはずのない正解に従って生きようとしていた私に代わりに与えられたのはこの卑しい覗きたがりの瞳だった。昔から空が好きで、人の顔色伺って何が悪いのなんて言えなかったあの頃の私はよく見上げていた。理科の授業で天気を調べる宿題が出た時もわくわくした。そこには正解なんかなくて、ただひたすらに自

由が広がっているように思えたから。振り仰ぐ度に異なる貌をみせる、薄らかな青も遠のいてゆく藍色も、焼け落ちてゆく後悔のような夕焼けもぜんぶ同じ空だ。夜空の面で輝きを揺らめかせている軌道上の星々もなにかもを含んで、ただ空は空だった。そんなだったから空が視えるんだろうと最初は喜んでいただけ、それが人の心だと気付いて眼を潰そうかと思つたこともある。そんな風に自分を傷めることはしちやいけないことだつて両親に何度も言われてたからそんなことはできなかったけど、でもじゃあこの眼はどうすればいいの、なんて誰にも相談できなかった。それから両親が死んで、どうにもならなくなりそうだった私が普通に生活できているのは、こんな風に私を支えてくれる六花と、私が、私が大好きな跡子のおかげだ。でも二人がいても、私は私のままでしかない。嫌われたくないという気持ちや寂しいという感情は贅沢品だ。ほんとうは、ほんとうの正解というのは、きつと私みたいな人間じゃなくて、もつと奔放で勇敢で清冽とした人間に与えられる幸せであつて、私みたいな人間なんかには絶対にやつてこないのだ。不幸せがお似合いなのだ。私がつまとう不信や不安はこんな心に似合いのそれは灰がぶり。「まーた余計なこと考えてるでしょ」

「うげあ」

でこびん。痛い痛いおかしい、でこびんの痛さじゃない。頭蓋骨割れちゃうんじゃないのこれ。頭を抱えて呻いている私なんてお構いなしに六花は続ける、「あのさあ、べつに慧ちゃんがちょー善人だとは言わないよ？あたしも別にそうあつて欲しいとは思わないし。でもね、さつきみたいに困つた人がいて、その人の役に立つて、それでなんで落ち込むことがあるわけ。慎重なのはいいけど、臆病なのはもつたないよ」励ましてくれるのは嬉しいのだけれど。六花はいつだつて優しくして正しい。桔梗坂さんは良い子だったけれど、六